

人呼んで、グラハムス
ペシヤル!!

銀髪！銀髪！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気持ち悪い男を夢見た男が気持ち悪い男に憑依した。

目次

人呼んで、グラハムスペシャル!!

1

肉を切らせて骨を断つ



13

人呼んで、グラハムスペシャル!!

諸君、私はフラッグが好きだ。

と、言ってもフラッグを知らない君達には、私が国旗か何かの旗が好きだと思われるのだろう。

フラッグ、正確には機動戦士ガンダムOOに登場する、SVM S-01ユニオンフラッグと呼ばれる機体。そしてフラッグから派生したフラッグカスタム、そしてプレイブ。私はその機体達が大好きだ。

いくら代を進もうと、改良を加えようと戦闘機、飛ぶことを意識して作成されたフォルム。

そして何より、フラッグ達に登場している精鋭のパイロット、『フラッグファイター』達。フラッグという機体に誇りを抱いて戦場へ向かっていく彼らが、私は大好きだ。

だがあくまでそれらはアニメ、創作の世界。現実には人型兵器など存在しないし、それが必要になるほどの技術も戦争も存在しない。まだ世界中が平和という偶像を目指すことが出来ているからだ。

故に、私は航空自衛隊のパイロットになった。例えフラッグに乗れなかったとして

も、戦闘機に乗れば、それはフラッグの飛行形態に乗っているのと同じこと。幸福感に包まれながら、乗ることが出来た。

私がパイロットになって何十年目だっただろうか。世界は核の炎に包まれた。10年以上も前から問題視されていた朝鮮半島が、世界の主要国各国に向けて十を超える核を打ち込んだ。無論、それは宣戦布告すらされていない奇襲。つまりは戦争の始まりを意味した。

朝鮮は中国周辺までと秘密裏に同盟を結んでおり、連盟国として戦争の開戦を告げた。

私のいる日本は敵国、半壊したアメリカではなくヨーロッパ諸国を中心とした連合に参加。

世界中がまたも戦争を取り戻した。第三次世界大戦の開幕である。

パイロットの練度、機体技術等は連合側に軍配が上がった。なにせ連盟側の兵器製造の中心は、安価で劣悪な中国である。戦闘中の機体の不慮などで、何度自滅していったことか。

だがそれでも戦争が泥沼へと突入したのは、やはり数の差。

こちらが戦車を100用意すれば、あちらは300出してくる。戦闘機を50用意すれば100は出てきた。昔から人民の飽和により苦しんできた国が、飽和によつてこち

らを押し潰してきたのだ。

私は優秀なパイロットだったため、各国のエース達の合同部隊に所属させられていた。日本には、居られなかった。

何日も連続で、私の耳に入ってくる。かつての部下や上司達の死亡報告。何度拳を握りしめ、爪を食い込ませて肌を破ったことか。

彼らの無念と後悔を果たすべく、私は戦場に解き放たれた時、激情と共に空を駆け、機体の限界を超えたマニユバ。耐Gスーツの容量を超え、私の身体を壊すほどの超高速機動。

補給で帰投する度に、何度愛機を乗り換えることになったか。何度撃墜されたことか。何度敵国の捕虜になりかけたことか。

やがて私は敵からも、味方からも、『ルーデルの再来』と呼ばれるようになった。全く、誰がそんなことを言ったのか。私はかの英雄のような強い人間ではない。周りを魅了するようなカリスマがある訳でもない。

ただやれることを精一杯やっただけだ。いつだってそうだ。私は正しいなんて思っただことはしていない。私はやりたかったこと、やれることをやっただけだ。そこに善悪のことなど一切考えてなどいない。

そう、私はただ、散っていった同胞達の無念を果たしたい。ただそれだけだったのだ。

いや、それは嘘なのかもしれない。ただ復讐者の仮面を被っているだけなのかもしれない。もし、私に自分自身の考えていることを見抜ける力があれば、もしかすれば分かりし頃に夢見た『オーバーフラッグス』の隊長に憧れていただけなのかもしれない。彼もまた、私と同じように復讐者の仮面を被っていたのだから。

ならば、今こそその仮面を脱ぎ捨てよう。欺瞞の自分には必要ない。遅かれ早かれ、すぐに死ぬ私に、もうそんなものは要らないからな。

機体から鳴り響くアラート。防弾ガラスから見える機体の羽からは黒煙が吹き出ている。脱出装置は機体が高速戦闘で歪んでいるため機能しない。もう逃げ場は、存在しない。私はここで死ぬ。

備え付けの機器から、今の部隊で親交を深めた仲間たち。私の専属のオペレーター、そして散々迷惑を掛けてきた技術者の親友から脱出してくと、死ぬなど言われる。もう不可能なのは分かっているだろうに。この機体の状況は、常にモニターしているはずだろう? いや、だからこそか。

覚悟は決めた。どの道、私の体はもうダメだ。既に機体の破片は私の身体に突き刺さり、幾つか内臓がやられている。その証拠に、逆流してきた血が喀血され、機体内部を赤に染める。ここで帰った所で、どれだけ持つか。そもそも今この機体では帰れないし、ここは海上だ。

落ちていく先には敵主力空母。ふっ、もう持たない命。残せるものは全て残してきた。ならば後は、示すのみ。私達の後に続いてくれる者達に。

受け入れよう、その役目を。

「未来への水先案内人は、この——が引き受けた!!」

無意識にも、彼と同じセリフを吐く。私は雄叫びを上げ、壊れかけの機体を操縦する。

「これで最後だ！持ってくれよ、我が愛機よ!!」

止めていたエンジンを蒸す。壊れかけのエンジンではいつ停止するか分からないが、10秒あれば十分だ。迎撃が追いつかないほど加速する。もう曲がるつもりは無い。彼らの防御を食い破るように突撃する。

撃ち落とそうとしたところでもう遅い。既に、空母のブリッジは目の前だ。

刹那、かつて味わったことの無い衝撃と共に私の身体が大熱波に晒される。肌が焼かれる。身体に機体の破片が突き刺さる。少ない寿命が更に縮まっていく。まだ意識は残っているが、身体に痛みはない。

最後の最後で、私は私にやれることをした。戦争に勝つために、誓を果たすために、例え卑劣と呼ばれる手でも使ってみせよう。例えば、神風特攻であろうとも。

「——、——、今、そっちへ行くぞ」

かつて失った部下達の名を呼び、私は意識を落とした。

2041年、——、敵空母に機体と共に特攻し、死亡。

皇歴2014年。神聖ブリタニア帝国。これが今、私が生きている年代であり、仕えている国である。

全く、奇天烈なものもあつたものだ。まさかあの特攻の後、死んだと思つていたので、まさか生まれ変わるとはな。転生、というやつか。神などは信じていなかったが、存在するのかもしれないな。

では、今の私の自己紹介をしよう。私の生まれは皇歴1997年、誕生日は9月10日。星座は乙女座。現在の年齢は17歳。ブリタニア帝国の戦争孤児。

そして名は、『グラハム・エーカー』という。

グラハム・エーカー。私の大好きな『オーバーフラッグス』隊長。機体性能の劣るフラッグでありながら自らの人間外れな技量でガンダムを追い込んだ男。

鋭い目付きに金髪の髪。そう、私はグラハム・エーカーになったのだ。

だがこの世界に、〇〇の世界にあつたユニオン、A E U、人革連は存在しない。ブリタニア帝国が世界の多くを植民地とし、世界最大国家となっている。

ブリタニア帝国では植民地をエリアと呼び、エリアに住んでいた人々のことをナンバーズと呼ぶ。ナンバーズはハッキリいえばブリタニアの奴隷。貴族制のブリタニアからしてみれば最下層の人々。その上に名誉ブリタニア人という、ナンバーズがブリタニア人と名乗ることを許された地位もあるが、名誉ブリタニア人は当然の如くブリタニア人に虐げられ、同胞のナンバーズ達からも国を捨てた裏切り者として敵視されている。

名誉ブリタニア人にしろ、ナンバーズにしろ、生き辛い世の中だ。

「全く、また一段と荒れたものだな。そう思わないか、カタギリ」

窓から次々と流れていくゲット——ナンバーズが暮らしている荒廃した土地を見ながら、隣にいる親友に話しかける。

「仕方ないさ。ブリタニアの支配を簡単に受け入れるはずがない。それにどこかが反抗すれば今度は自分達も、と思つて立ち上がる。余力がある限り何度でもこの連鎖は起こるだろうね」

そう失笑して、車を運転しているのは私の親友であり、若き技術者である日系ブリタニア人四世である、ピリーカタギリ。私より4歳上だが、とある人によつて出会い、意

気投合しこうして親友となっている。

そして彼もまた、〇〇にてユニオンの技術者であった人物だ。

「それが愛国心か、それとも復讐心か。そればかりは本人達にしか分からないか」

そうしてたわいないことを話していると目的の場所、第四航空演習所に辿り着いた。既に待ち人はいるのか、愛用している車が見受けられる。ビリーに車を置かせて、揃って巨大なハンガーに向かう。

「ようやく来たか、グラハム、ビリー」

「待たせてしまつて申し訳ありません。何分、一昨日の暴動で道が塞がっていたもので」
そこに居たのは齢67になる男性。カタガリの恩師にして、戦争孤児の私の恩人でもあるこの方はレイフ・エイフマン。機械工学、材料工学など、あらゆる分野に精通した、ブリタニアでも最高位の技術者。私は親しみを込めてプロフェッサーと呼ばせてもらっている。

「早速だがグラハム、ロッカールームで専用のパイロットスーツに着替えてきなさい。君の機体が待っている」

そう言つて、渡されたのはUSBのようにも見えるデバイス。黒に染められたデバイスには、白銀でSVM-S-01と刻まれている。それを手に取り、心が熱くなる。ずっと待ち続けていた。こうして私が、プロフェッサーの機体に乗ることを。

私の晩年の夢が、ようやく叶う。

白を基調としたパイロットスーツに着替え、扉を開く。そこには鎮座する奇妙な形の戦闘機があった。機体の表面に触れる。冷たい鋼鉄の感触が、柔肌のように暖かく感じる。

コックピットに乗り込むと、そこは私の知るナイトメアフレームの持つ、ゴツゴツとしてボタンなどの操作類が多いコックピットではなく、滑らかで整っている操作系。受け取ったデバイスを差し込み、機体を起動させる。

発進ゲートが開く。目指す先は大空の大海。この機体で飛ぶことを夢見た、変わらぬ空。

微笑みを浮かべながら、私は出撃する。

「グラハム・エーカー、フラッグ、出るぞ!!」

ペダルを押し込む。瞬間、肉体にかかる巨大なG。幾ら耐Gスーツを着ていようと、その圧力は私の身体を押し潰さんと、さらに強くなつて押しかかる。

「この駆動、この重圧。素晴らしいぞプロフェッサー!!」

マニユーバをしながら空を駆け巡る。バレルロールから始め、宙返りやハイヨーヨー。前世で覚え、今世で鍛え上げてきた航空技術を遺憾無く発揮する。

機体スペックの時点で前世より数段上。ならば、私が本気を出しても、手加減しなくても構わないだろう！

『バルーン射出』

地上より一定の高度を保ちながら、幾多のバルーンが浮かび上がる。それらは全て擬似敵としての役目を持った演習用の物。本来であれば使用しないこれは、今日この時のために用意されたものだ。

「お前もまだまだ足りないだろう。さあ、私と一緒にもつと昂るぞ、フラッグ!!」

機体の先頭に着いている試作型のリニアライフルが光の軌跡を吐き出す。フラッグの専用武装であるリニアライフルは貴重なため、量産が難しいが、これはフラッグによく馴染む。

高速戦闘を行いながらも正確に行える射撃。弾丸はバルーンを着々と消し、新たなバルーンが追加されていく。

「焦らしてくれるな、プロフェッサー」

次から次へと浮かんでいくバルーン。それだけではない。途中から機体からロックオン警報がなっている。バルーンから出ていたレーザーポインターが、それを物語って

いた。

「プロフェツサー、変形機構は使えますか？」

『出来ないことは・・・まさか君は・・・』

『無茶だグラハム！フラッグには確かに変形機構が付いているが、それは空中で使うには余りにも無謀だ！姿勢制御や他の問題。いくら君の操縦技術がずば抜けているからって、そもそも空中での変形を想定していないフラッグで——』

「ならばその道理、私の無理でこじ開ける！」

『グラハム——!?!』

一方的に通信を切る。カタギリには悪いが、変形機構があるのならやるしかないだろう。何故なら私はグラハム・エーカーなのだ。誇りあるフラッグファイターになるのだ。ならなければならないのだ。ならば、やらないという道はない。

「私と一つになれば、フラッグ!!」

変形機構を、使う。確かに、カタギリの言った通りだ。姿勢制御プログラムが滅茶苦茶な数値を出している。使えないのなら不要！私の技術と、フラッグの性能で可能にしてみせよう！

「ぐうつ!!おとおおおとおおお!!」

まだだ。もっと姿勢を安定させろ。機体を止めるな。バラバラになりそうな痛み？

そんなもの、気合と愛で乗り切るのだ!

「人呼んで、グラハムスペシャル!!」

成功した。確かに私は今、戦闘機ではなく人型の巨人となって空にいる。だがモニターを見れば、機体の各所、関節部のいくつかにダメージが見受けられる。エネルギーパックも損傷してしまった。やはり無茶な機動だったか。

プロフェッサーには悪いことをしてしまったな。

『全く、なんて無茶をする』

「申し訳ありません。ですが機能がある以上、やってみた方がよろしいかと」

『そうか……。今の機動でフラッグのダメージは相当なものになっただろう。データも充分に、こちらが思っていた以上に取れた。速やかに帰投しなさい』

「了解しました」

ふっ、終わりか。物足りなさを感じるが素晴らしい時間だった。次共に駆ける時は戦場になるだろうな。

肉を切らせて骨を断つ

ロシア首都ヤクーツク近郊。

「ちっ」

忌々しそうにブリタニア帝国第二皇女コーネリア・リ・ブリタニアは第五世代KMFの試作機である紫のグロースターのコックピットで、舌打ちする。

彼女が主導となり、ロシアを攻め始めてから半年。本来であればここまで時間をかけるつもりはなく、最短で3ヶ月で終わらせる勢いで進軍しようとしていた。だが思った以上のロシアの極寒の地系と、ロシアが開発した新型のKMF擬きに、停滞を余儀なくされていた。

既に停滞して二週間。無理矢理の進軍と極寒の環境で兵達の疲労は最高潮に達している。コーネリアの騎士であるギルフオード、そしてコーネリアの顔にも疲労は見える。

「思った以上にやるじゃないか。ロシアの荒熊……！」

KMF擬きにだけではここまで疲弊はなかった。だがロシアには『ロシアの荒熊』の異名を持つパイロットがいる。その実力はブリタニアの魔女の異名を持つコーネリア

と互角かそれ以上の差を見せている。それだけではない。戦略、戦術。指揮官としても並外れます力を持つ恐るべき男。

そしてロシアのKMF擬きであるティエレンと呼ばれる機体。

分厚い鉄板の集合体を思わせる巨体。その巨体通り鈍重な速度だが、武装は全て大火力。並のKMFなら一撃で破壊できる砲塔をメイン武装に据えており、更には計り知れない防御力。

グロースターの大型ランスを複数回叩き込まないと装甲を破壊できないという堅牢な防御。だが破壊した機体を分解してみれば、その機体はまるで棺桶。脱出機能などなく、パイロットが直立して操縦する。コックピットの入口を歪まされたらその時点でパイロットごと叩き潰される設計。

最低限の安全しか確保されていない機体。嫌悪感は拭えないが、それだけ相手が切羽詰まっていることが分かる。

「陸路での援軍は期待できないか……」

吹雪のせいでランドスピナーはいつもと同じ動きはできない。それに対してティエレンは専用のランドスピナー——まるでスキー板にボールをつけた特殊なランドスピナーを使っている。

「このままではあの要塞は攻略出来ない。だが撤退などしてしまえば……!!」

問題は山積みである。例え平面でティエレンをどうにかした所で、首都付近にある要塞には攻めきれない。長距離砲塔が隙間なくこちら側へ向けられている以上、今のままでは勝ち目が薄い。

『コーネリア様！シユナイゼル殿下から伝達がありました！』

「なんだ、ギルフォード」

『援軍として小隊を一つ送る。有効活用してくれたまえ。との事です』

「援軍？だが一部隊如きに何が——」

それは、突然レーダーに映った。ファクトスファイアが壊れたのではないかと思うほど、高速で動く青い^{味方機}点。計七個の青い点はどうやって猛吹雪の中をここまでスムーズに来たのか。その答えは空から降りてきた。

コーネリアのグロースターの近くに着陸して来たのは7つの見たことの無い黒い戦闘機。ギルフォードやダールトン将軍は警戒してコーネリアの前に立つが、コーネリアに制される。

まさか戦闘機が、時代遅れの存在が援軍？そう普段は尊敬している兄を叱責したくなるが、そんなことは後回しだ。

隊長と思わしき男が6人の部下を率いて、機体から降りてコーネリアのグロースター目掛けて歩いてくる。コーネリアはグロースターのコックピットを開き、機体の背中、

コックピットの上に乗立つ。

寒さに身を抱きかかえなくなる感情を制しながら、ブリタニア皇女の威厳を持つて彼らを見下ろす。

「兄上が言っていた援軍とは、お前達のことか？」

「はっ。グラハム・エーカー中尉、並びにオーバーフラッグス隊、シュナイゼル殿下の命により馳せ参じました」

オーバーフラッグス。聞いたことの無い部隊だ。少なくとも戦闘機を乗りこなす部隊など、今のブリタニア軍には存在しない。

「それで、お前達でどうするつもりだ。まさか敵の要塞、そしてKMF擬き。それら全てをお前達小隊一つで相手をするつもりか？」

「そのつもりです」

「この状況で、ふざけているのか」

「いえ。心底真剣に言っているつもりです」

剣を首に押し付けても、瞳の色を少しも変えることも、怯むことも無い。

「どうするつもりか、話せ」

「はっ。オーバーフラッグス隊で上空から敵KMFを各個撃破。そのまま陸路を進むコーネリア皇女殿下率いる部隊を援護しながら、要塞に対して攪乱を行います」

「あの装甲を破れるのか？ お前達で」

「可能です」

「・・・分かった。貴様の言う作戦を実行しよう。ただし我々が進軍するのは貴様らが要塞に攻め込む直前だ。二十近くのKMF擬きをどうにか出来なければ、こちらは攻めることは出来ない。それでも構わないというのなら、やるといい」

「イエスユアハイネス」

躊躇いもなく言い切るグラハムに、コーネリアの目が見開かれる。彼我の戦力差を理解していないかのような物言い。グラハム・エーカーとは愚者か、果たして強者か。コーネリアには現段階では愚者にしか思えなかった。

「オーバーフラッグス全機、フルブラスト！」

通信を通してブリタニア軍全機から聞こえるグラハムの声。その声と共に光の軌跡を描きながら、天空へ飛び立つ7機のフラッグ。隊長であるグラハムを先頭に、吹雪を正面から突っ切っていく。

「フラッグファイター達へ通達。これが、私達オーバーフラッグスの初陣だ。敵は不落

の要塞、そして防御特化のKMF。敢えて言うぞ、死ぬなど」

『了解』

「見えたぞ！ここから部隊を二つに分ける。ハワード、ダリルは私と正面から攻める。ジョシユア、リズロ、ケイオス、デインは後ろから回り込め」

グラハムの命令と共に4機のフラッグが速度を上げてグラハムを追い抜く。グラハムは目下でこちらを認識し、砲塔を構えるティエレンを見下ろし、口端を釣り上げる。

『嬉しそうですね、隊長』

「無論。待ち望んだフラッグファイターの戦場だ。コーネリア皇女殿下には悪いが、熊狩りを楽しませて貰おう！」

ハワードに返しながら、グラハムのフラッグは急降下を始める。目下にいるティエレンがフラッグに向けて砲塔を向け、容赦なく撃ち続ける。

「柔肌の機体に、そのような物騒な物。だが!!」

当たらない。フラッグの横長の機体に、威力重視の砲弾は掠りもしない。そもそもティエレンの持つ滑空砲は連射向きではない。雪が積もる大地では、上に向かって撃つてしまえば機体の足場は崩れ、狙いが大幅にぶれてしまう。そしてティエレン自体が急なロールアウトだったせいか、射撃OSは未完成でパイロットの技量に一任されている。

そんな砲撃などフラッグには当たらない。フラッグの先端に付いているリニアライフルは砲撃の雨をすり抜けながら、青白い弾丸を放ち、ティエレンの滑空砲を的確に潰していく。

「当たらなければどうということはない!!」

フラッグが変形する。無骨な戦闘機から、KMFにしては細身で少し巨大な人型へ。脚のバーニアをふかしたフラッグは降下の勢いを完全に殺し、左手に持ったリニアライフルで戸惑い動きが止まるティエレンを乱れ撃つ。

「やはり硬いなーならば、こうするまで!」

リニアライフルの一発二発では装甲の破壊は不可能。だが胴体に凹みは与えられた。フラッグの右腕——本来のフラッグであれば左腕に付いているディフェンスロッドを突き刺すように叩き込み、無理矢理回転させて胴体を抉る。

「ここは戦場。故に無惨等という言葉に」

味方の報復をせんと、滑空砲に対人機銃、小型ミサイルポッドからあらん限りの弾薬を吐き出す。しかしフラッグは右に左に、まるで未来でも見えているかのように躲し、身を翻すと同時にリニアライフルでティエレンの頭部を撃ち抜こうとする。

しかしティエレンが上体を捻り、肩についているシールドでその身を守る。

「聞く耳持たん!」

着地と同時に、全力でバーニアをふかす。フラッグのあまりの機動に、更に狙いが乱雑になるティエレン。

既に恐慌状態となっているパイロットでは、テンションMAXのグラハムとマトモに戦えはしない。

簡単にフラッグの接近を許し、フラッグは脚部に収納されていたソニックブレードを、ティエレンの胴体へ押し込む。

超高温のナイフはティエレンの装甲を齧るように切り裂いていき、恐怖に塗れた悲鳴を上げるパイロット諸共内部から破壊する。

「ようやく二機か」

フラッグをティエレンの爆発から引き離し、二つのティエレンだった鉄屑を見下ろす。予想以上の装甲の硬さ。もしパイロットがもつとKMF戦になれていたのなら、腕の装甲一つは取られていたかもしれない。

「殲滅は順調に進んでいるな——リーダーに反応?!一機だけか!!」

フラッグは左を向いてティフェンスロッドを地面と水平に構え、飛来してきた弾丸をロッドで防ぐという本来の使い方をしながら、マズルフラッシュが見えた方を見詰める。

吹雪の中を切つて現れたのはティエレン。だがその色は今までのティエレンの色と

は違い、薄い茶色で染め上げられている。

「指揮官機。ということは一——」

「唯一単独行動をとっているKMF。だとしたらこの機体が——」

「ロシアの荒熊
敵エース機か!!」

まるで示し合わせたかのように両者互いにフルスロット。ティエレンのカーボンブレードと、フラッグのソニックブレードがぶつかり合い、火花を上げる。

次瞬、ティエレンが滑空砲で横殴りにしようとしたのを、同じくフラッグが横殴りにしようとしたリニアライフルで止める。

「会えて嬉しいぞ、ロシアの荒熊!!」

「何者だ、このパイロット」

まるで軽業師のように、フラッグは右脚を振り上げ、ティエレンに振り下ろす。だがその蹴りはティエレンが身を乗り出したことにより、肩部シールドに当たるに留まる。

両者、一斉に離れ互いのメイン武装による牽制射撃が始まる。牽制射撃と言っても、その攻撃は一つ一つが確実に当てに行かんとする射撃。

「敢えて言わせてもらおう。グラハム・エーカーである！」

前へ、左へ、後ろへ、斜めへ、右へ。

人機一体。まるで己の身体のように機体を動かす両者。超重量のため。動きがフラッグよりも遙かに遅いティエレンは、持ち前の頑丈さとパイロットの実力でフラッグの攻撃を退ける。

装甲を新型のカーボンE装甲という、新しい装甲になったとはいえ、フラッグの耐久性はティエレン相手では心許ない。滑空砲一つ掠るだけで大ダメージになる砲撃を、グラハムはスレスレで避ける。

『援護します、隊長！』

「援護は無用！ハワード、ダリルはジョシユア達と合流し、残存する敵兵を叩き、そのままコーネリア皇女殿下へ信号を送れ。私は熊狩りで忙しい！」

敵KMFを全て破壊したハワードからの援護の通信を、一方的に切り捨てる。グラハムは過去最高に昂っていた。フラッグに初めて乗った時以上に。ロシアの荒熊、そしてティエレンという強敵に、フラッグファイターとして戦えることを。

既にグラハムはロシアの荒熊以外は眼中にはない。今ならコーネリアからの通信を開くことなく切るだろう。物事に集中しすぎる、グラハムの悪い所だ。その結果、王族からの通信を無視するなどという暴挙に出ようと、グラハムは今この瞬間に、この時

だけに生きている。

「まだまだ物足りないだろう、ロシアの荒熊！」

「攻撃が鋭くなっている……。成長しているのか、このパイロットは」

リニアライフルの狙いが正確に、ティエレンの弱点部と言える関節を狙ってきている。そこだけではない。胴体に被弾した部位を狙い撃つて来ている。力尽くでティエレンの装甲を破壊しようとするその気概。並のパイロットでは考えつかない、考えついたとしても実行することなど当然不可能な行為を、グラハムはやってのけている。

このままでは不味い、とロシアの荒熊は危機感を秘めながら、滑空砲を旋回して避けるフラッグを見遣る。

「長期戦はこちらの不利。このままでは要塞も突破されるかもしれない。ならば、意地でも目の前の敵を倒し、援護に向かわねば」

「私は執拗いのでな！逃がさんぞ！」

ティエレンの行く先に回り込むようにフラッグが入る。ギリギリとした攻防。

互いのブレードが火花を散らし、互いの重火器がブラッシュを炊く。

エース級のパイロット同士による決死の殺し合い。

天秤の如く傾くことの無い状況に、とうとう勝利の女神は天秤を揺り動かし、勝者を決めようとした。

「貰ったぞ!!」

「ぐうつ——!! 右側がやられたか、しかし!」

「なんと!？」

「肉ならくれてやる!!」

ようやくフラッグの射撃がティエレンの背中に付いているバーニアの一つを破壊する。しかし流石はロシアの荒熊。タダではやられず、フラッグのメイン武装であるリアライフルを滑空砲で破壊する。

「今ので滑空砲は弾切れ。だが、敵もそれは同じ」

「ライフルを破壊された。これは、始末書ものだ。しかしどうやら相手も弾切れのようだ。ならば、機動性で勝るフラッグが、この戦いに有利となる——!!」

「やはり攻めてきたか!」

ソニックブレイドを左手に、突撃を仕掛けるフラッグ。ティエレンは即座に滑空砲をパージし、両手にカーボンブレードを装備させる。

「二刀流か!？」

「速度はともかく、手数はこちらが上だ!」

人型の機械が戦っているとは思えないほどの高速の剣戟。現代の戦場には相応しくない光景。だが約千年前にはよく見られた、原初の戦い。

焼き切るソニックブレイドと叩き潰すカーボンブレード。互いに食らわせることが出来れば簡単に勝負は決するはずなのに、どちらも有効打を入れることが出来ない。

フラッグは容易く牽制で蹴りなどの行動を起こしてしまえば、いくら素早い機体とはいえ、すぐさま両断されてしまうだろう。

ティエレンも動かせるのは両腕と腰のみ。背中には半壊しているバーニアを抱えている。

カーボンブレードを焼き切る為に鏝迫り合いにいけば、もう片方のカーボンブレードに胴体を切り裂かれてしまう。ソニックブレイドの間合いが長ければまだやりようはあったが、もうどうこう言っては行かない。

「これは、私も覚悟を決めなければな！」

「正面?! 自棄になったか!？」

フルスロットでの爆発的な加速。肉体を押し潰してくるGを無理やり押し殺し、フラッグを突撃させる。ソニックブレイドを下から流れるように切り上げる。狙ったのは胴体ではなく、カーボンブレードを持っているティエレンの左腕。

「ハアアッ！」

装甲を無理矢理貫き、ケーブルを焼き千切りティエレンの左腕切り落とす。あまりの速度の加速によりティエレンを対応を遅れ、片腕を取られたが、何時までも止まってい

るはずはない。既にティエレンのコックピット目掛けて、右腕のカーボンブレードは振り上げられている。

「貫った!!」

「いいや、まだだとも!!」

カーボンブレードがコックピットを叩き潰さんとするその刹那、フラッグは転ぶように体勢を崩し、右腕を盾にするように振り上げる。振り下ろされたカーボンブレードはコックピットのない場所を通り、だがそのまま胴体を叩き潰そうとするがデیفエンスロッドが盾として機体とカーボンブレードの間に存在し、カーボンブレードはフラッグの胴体を叩き潰せず、デیفエンスロッドごと右腕を切り離れた。

「貴方もやった通り、肉を切らせて——」

「しまった!?!」

「骨を断たせてもらおう!!」

整っていない体勢で、だがそれでも刃を突き刺さんとフラッグはソニックブレードを振り上げる。振り下ろされたばかりのカーボンブレードは間に合わず。フラッグは右腕を奪われる前からそうする為に行動を起こしていた。

ソニックブレードはその熱を持ってティエレンの装甲を溶断し、その刀身を中にいるロシアの荒熊に迫らせる。逃げ場はない。棺桶と称されたこの機体に脱出装置など付

いていない。

完全な敗北。荒熊と称された男はフラッグのモノアイを見詰める。

「見事だ……！」

称賛の言葉と共に、機体は爆散する。ほぼ零距离にいたフラッグはテイエレンの爆発に巻き込まれ、機体の表面は溶け、まるで荒熊の血化粧のように黒い煤に染める。

「全く、……までやられてしまうとはな」

画面に表示されているERRORの文字。既にソニックブレードを使うエネルギーさえも失ったフラッグ。帰りの分の燃料を考えると、この後の掃討戦には参加できないだろう。心の中で愛機たるフラッグを労いながら、ゆつくりと変形させる。

変形させたその姿は、当初の時よりもかなりみすぼらしい姿だ。当然と言えば当然だろう。右翼たる右腕をやられ、更には唯一と言つてい武装まで失ったのだ。

「私は先に拠点へ帰還しよう。なに、流石のコーネリア皇女殿下も、こんな機体に鞭打つような真似などしないだろうさ」

青白い軌跡を残しながら、フラッグは拠点のポイントまで飛行して行つた。